

## 編集のことば

23号の特集はIGS主催国際シンポジウム『トランスジェンダーが問うてきたこと——身体・人種・アイデンティティ』（2019年12月15日）で報告された論考をベースに編集した。

シンポジウムを企画したきっかけは、お茶の水女子大学が2020年度から入学資格を戸籍に基づく「女性」からトランスジェンダー女性にまで広げると発表し、ネット上でトランスジェンダー排除とも言える激しい議論が巻き起こったことにある。トランスジェンダーの包摂・排除の対立的な議論に入る前に、論争の前提とされている「女性」と「トランス女性」の二項対立的な構造をまず問うべきではないか。つまり、「女性」とは誰なのか？それは誰にとっても自明なカテゴリなのか？誰が、その人を「女性である」と決めているのか？ジェンダー・アイデンティティと身体の関係はどのように構築されてきたのか？などであろう。トランスジェンダーの（不）可視化の歴史からフェミニズムはsex/gender/sexualityをめぐる権力の作用について多くのことを学んできた。

これらについて学術的な研究蓄積はあるものの、それが十分に共有され議論されてはこなかった。そのギャップを少しでも埋めるためにシンポジウムを企画し、トランスジェンダー研究分野の先駆的な国内外の研究者4名を招聘して報告と議論をしていただいた。充実した有意義な議論ができたと思うが、とくにストライカー教授による基調講演は、分かりやすい通史でもあるため、国内の広い読者層に読んでもらいたく、あえて日本語の翻訳を掲載した。

さらに今回、初めての試みとして、特集テーマで投稿論文を募った。トランスジェンダーの研究は日本でもまだマイナーであり、この研究分野の論文が『ジェンダー研究』に投稿されたことはこれまでなかった。せつかくトランスジェンダーを学術的に議論する誌面を設けたのだから、広く研究論文を募集し、優れた個別研究を束ねて紹介したいと思い至った。実際に募集を始めると期待以上に多くの論文が寄せられ、査読を通過した2本を特集に加えることができた。これまでの特集とは異なったこのような開かれた試みが特集の質をさらに上げたと自負している。本誌の特集が今なお続くトランスジェンダーをめぐる論争を学術的な知見から見直す機会となり、トランスジェンダーへの理解を深めることに資することを期待したい。

また、今回の特集は石丸徑一郎さんにゲスト編集長をお願いした。丁寧に原稿に対する相談に乗っていただき特集の企画はとてもスムーズに進んだ。そして、業務量を増やしてしまったにも関わらず、特集論文を公募する趣旨に賛同して、見事に23号を仕上げられたジェンダー研究所RF平野恵子さんを始め、書評担当のRF仙波由加里さん、編集スタッフの和田容子さん、事務局の滝美香さんに感謝を申し上げる。とりわけ、東京大学の清水晶子教授にはシンポジウムの企画段階から多大なご協力をいただいた。ここで感謝の意を表する。